

# 雨乞儀式の一考察 —— 脚折雨乞を中心として

徳植 勉

## A Study on a Ceremony of Praying for Rain — The Focus on Suneori Amagoi

Tsutomu Tokuee

**Abstract:** Suoneori Amagoi is a ceremony of praying for rain, and has been performed in Suneori District of Tsurugashima City in Saitama Prefecture of Japan since Edo period. In the past, rain-praying ceremonies were held in more than 100 areas of Saitama Prefecture. However, Suoneori Amagoi is the only rain-praying ceremony in Saitama Prefecture now. The content of this ritual is to make a 36 m dragon out of straw and bamboo, carry it to the pond (named Kandachigaike) where dragon god once lived. Get water from the pond of Raiden Shrine (Raiden means God of thunder and rain) in Gunma Prefecture in advance, put this water in Kandachigaike and the Shinto priest prays. After that, carry the dragon into Kandachigaike. Villagers believe that the dragon will become a god and ascend to heaven. However, there are some questions about this ceremony. First, Suoneori Amagoi is also carried out when it was not drought. Second, only in 1893, they received water from Togakushi Shrine in Nagano Prefecture. Third, a sword is tied to the tail of the dragon, the sword named Shiriken. In other prefectures, there have been cases of rain-praying and festivals tying swords to the tails of dragons and large snakes.

What is the meaning of this sword? The purpose of this paper is to consider these questions.

### はじめに

埼玉県にはかつて100余りも雨乞いが行われていたといわれるが、現在、雨乞いを行っているのは鶴ヶ島市の「脚折雨乞」だけである。江戸時代から行われており、戦後、いったん中断するが、1976年に復活し、4年ごとに実施されて

いる。<sup>らいでん</sup>群馬県の雷電神社の貰い水を池に注ぎ、36mの藁と竹で作った大蛇（地元では龍蛇という）を池に入れて雨乞いをする。

雨乞いに関する先行研究は多いが、脚折雨乞については平沼浩「地方創生と伝統行事～土地の記憶を行動で共

有する～③「脚折雨乞」前編・後編」(2017)がある。地方創生という観点から住民・復活・水の神をキーワードに2016年の雨乞を中心に分析したものである。

復活以降は地域活性化のための行事として実施されているが、かつて日照りの害がない年にも実施されていること、明治26年(1893)だけ信州戸隠神社に貰い水をしていることなど、不明な点も多い。本論では、2008年の脚折雨乞を中心に、そうした不明な点について考察を加えていきたい。

### 1. 雨乞いとは

①『説文解字』の「雩（あまごい・日本語の音読みは『う』・中国語音はyu）」

「夏祭樂于赤帝以祈甘雨也。从雨于聲。羽雩羽舞也」<sup>[1]</sup>

(夏の祭祀に赤帝に対し舞楽を奉納し、恵みの雨を祈る。「雨」という字から構成され、「于」という音である。雨乞いは鳥の羽を持って舞うのである)

古代中国では鳥装をして舞楽し、雨乞いをしたことがわかる。赤帝は南方の神で、夏を司る。南方を守る四神は朱雀であるから「鳥」に関連が深い。

五行	木	火	土	金	水
五天帝	青帝	赤帝	黄帝	白帝	黑帝
四神	青龍	朱雀		白虎	玄武
方位	東	南	中央	西	北
季節	春	夏	土用	秋	冬

鳥は穀物の靈を運ぶ神聖な動物として、アジアの稻作地域では広く信仰され

ていた。日本でも弥生時代の遺跡に鳥装の人物が描かれたものや木製の鳥などが見つかっている。

#### ②文献上における日本の雨乞いの例

文献上の初見は、642年、「或いは牛馬を殺して、諸の社の神を祭る。或いはしきりに市を移す。或いは河伯を禱る。既に所(し)効(るし)無し」(『日本書紀』)とあるが、効果がなかったようだ。『日本書紀』にも「雩」という字を使った雨乞いの記録が数か所見られ、具体的な内容としては683年に、「百濟の僧道藏、雩して雨を得たり」とある。仏教的な雨乞いであり、弥生時代の鳥装によるものとは異なる。このころは雨乞いする総称として「雩」という字を使っていたと考えられる。以上は国が主催して行ったものだが、民間によるものとしては以下のものがある。

#### ③雨乞いの主な種類

- ア) 水神の棲む池や沼から「お水」をもらい、村の池などに注ぐ。
- イ) 山頂で火を焚き、煙を立てて鉦や太鼓をたたく。
- ウ) 龍や神輿などを造り、水辺に移して降雨を祈る。
- エ) 村人が神社などに籠って祈祷する。
- オ) 水神が住む池の水をかき回す。
- カ) 獅子舞などの芸能を奉納して降雨を祈るもの(獅子頭と鹿頭が多いが、神奈川県川崎市幸区の延命寺にある「南河原雨乞獅子頭」は、龍頭である)
- キ) 地蔵や神輿を川に投げ込む。
- ク) 水神が棲む神聖な池や沼に汚物や

動物の内臓や首を投げ込み、神を怒らせ降雨を祈る。

\*脚折雨乞ではア・イ（火は焚かないが、鉢や太鼓をたたく）・ウ・エ・オ（神聖な池をかき回して神を怒らせ、雨を降らせる）の要素が見られる。

### 2、雷電信仰と脚折雨乞

雷電神社（群馬県邑楽郡板倉町）は雷電信仰の総本宮であり、利根川と渡良瀬川に挟まれた場所に位置し、水が豊かな地域ゆえ、雨乞いや雹除け、雷除けの神社として知られている。火大神、大雷大神、別雷大神を主神としている。利根川上流・渡良瀬川・鬼怒川・吉利根川・江戸川流域の及ぶ関東地域に雷電信仰が広がっている。

蛇は田畠を荒らす小動物を食べてくれる農耕の神とされ、神社の注連縄も蛇を象ったものである。蛇をデフォルメしたものが龍である。龍は水神とされ、アジアの農耕社会では雨を降らす神と考えられてきた。龍と蛇とが一体だとする龍蛇信仰が生まれた。また雷が龍の形に似ているので、龍・蛇・雷が一体のものと考えられた。中国明代の隨筆『五雜組』には次のように記されている。

「一水族であるが、雲・雨・雷・風・雹を駆使するので神と称するのである」<sup>[2]</sup>

「雷が人を撃つのは多くは龍によって起き、あるいは地中より起こるのである」<sup>[3]</sup>

雷電神社の信仰圏では雷電講を作っ

て代参を送り、貰い水を頂いて地元で雨乞いをする。鶴ヶ島には2つの雷電講があつたといわれる。陸稻中心で赤土が多い当地では雷電神社の御手洗（みたらし）池から貰い水をして雨乞いをするのである。脚折雨乞では現在でも雷電神社から水を頂き、地元の雷電池（かんだちがいけ）に注いでいる。



脚折雨乞（2008年 筆者撮影）

### 3、脚折雨乞（すねおりあまごい・国選 択無形民俗文化財）

埼玉県鶴ヶ島市脚折町の雷電池で4年ごとに行われる雨乞い行事。江戸時代、新田開発で雷電池が狭くなり、ここに棲む大蛇が板倉の雷電神社の御手洗池に逃げてしまった。日照りが続くと、板倉の御手洗池からお水をもらい、当地の雷電池に注ぎ、大蛇（現在は龍蛇と呼んでいる。昭和4年の記録には「蛟龍」と記されている）を造って雨乞いをすると降雨があったという伝承がある。池の近くに雷電社が祀られている。雷電神社から水をもらい、脚折の雷電池に注ぐ。そして藁と竹で作った36メートルの大蛇を300人ほどの人が担ぎ、池に入れ、泳がせる。神の聖域を荒らすことによって神を怒らせ、雨を降らすというものである。最後には池の中で解体し、大蛇は龍神として

昇天するとされる。

伝承によると安永、天明年間（1772～89）に真言宗善能寺の住職隆英法印の時代に雷電社の前で雨乞いすると降雨があった。文化・文政年間（1804～30）頃までは効果があったが、天保年間（1830～44）からは効果がなかったという。〔4〕

江戸時代、脚折村の名主である田中家に伝わる文書の中に1813年（文化10）に書かれた『申年村方小入用帳』があり、

「壱貫四百文 右是ハ雨乞入用ニ御座候」〔5〕と前年の1812年（申年）に村で雨乞いがあったことがわかる。しかし、江戸時代の雨乞いの形態が現在のようなものだったかはわからない。

明治時代の田中家の日記には、明治10（1877）年7月19日に「蛇」を造って雨乞いをしたことが記されている。1964年に最後に一時中断したが、1976年に復活し、以降4年ごとに実施されている。

では雨乞いにはどれだけの効果があったのか。1874年から2016年（2020年はコロナウイルス感染拡大のため中止）までの結果を調べてみた。目安として儀式が行われてから1週間ぐらいまでの間に降雨があれば、効果ありとして以下のようにまとめてみた。

#### 雨乞いが行われた年と結果

実施年月日	結果	備考
1874年夏（月日不明）	当日降雨あり	雷電神社の神官が一晩祈祷、脚折では白鬚神社の神官が祈祷。 干害なし。

1877年7月19日	降雨なし	田中佐平太日記に記述あり。干害なし。
1893年8月15日	当日降雨あり	信州戸隠神社へ貰い水。干害なし。
1894年8月9日	不明	干害なし。
1929年8月8日	翌日降雨あり	7月12日～9月3日 干天
1932年8月7日	行事中降雨あり	干害なし。
1933年7月25日	不明	5月～9月 干天
1934年8月28日	不明	8月 干天
1947年8月6日 (16日とも)	不明	7月～8月 干天
1949年8月12日	17日少雨あり	干害なし
1964年8月9日	降雨なし	7月22日～8月19日 干天
1976年8月8日	翌日降雨あり	以降、4年ごとに実施
1980年8月3日	夜降雨あり	
1984年8月5日	9日降雨あり	
1988年8月7日	10日降雨あり	
1992年8月2日	当日降雨あり	
1996年8月4日	降雨なし	
2000年8月6日	翌日降雨あり	
2004年8月1日	7日降雨あり	
2008年8月3日	翌日降雨あり	
2012年8月5日	翌日降雨あり	
2016年8月7日	翌日降雨あり	

『脚折の雨乞い』鶴ヶ島教育委員会（2001）、藤倉寛三『雷電池 雨乞い板倉雷電様』鶴ヶ島市教育委員会（1996年追補第4刷）、過去の気象データなどを基に作成

23回の実施のうち、不明のものを除いて15回降雨があった。この結果をどうとらえるかは人により異なるだろうが、面白いことに干害がなくても行われている年があることだ。実際に日照りで苦し

んだと思われるは、1929年、1933年、1934年、1947年、1964年である。ここから考えると脚折雨乞は本来、五穀豊穣のため、降雨を祈ることが目的であったのが、それ以外にも重要な意味があったのではないか。。

雨乞いは村人が協力して、祈雨を行う重要な行事である。地域住民の連帯感を培うために行われたと考える。また昔は娯楽がない時代にあって、村人たちが全員参加し、行事が終われば御神酒などで飲み交わすという、住民交流と親睦を深める場として利用されたとも考えられる。

特に1976年以降は、オリンピックの開催年に合わせ、町おこしのために実施されるようになった。それでも「祭り」とせず、古式にのっとり厳粛な儀式として行われていることに価値がある。

### 4 1893年（明治26）だけ信州戸隠神社に貰い水をしたのはなぜか。

板倉の雷電神社にお水をもらいに行くのが恒例であるが、明治26年だけ信州戸隠神社にお水をもらいに行っている。その理由については今まで不明とされてきた。脚折側に記録が残っていないが、板倉町側に謎を解く鍵があるのではないか。

雷電神社のある板倉一帯は利根川と渡良瀬川流域に挟まれた地域で水害が多い。ゆえにこの神社では雨乞儀式はやらない。やったら水害を招いてしまうからだ。板倉一帯に明治23、24年と連続して渡良瀬川が氾濫し、農作物に甚大な被害があり、翌25年にも渡良瀬川流域で堤防が決壊するなど大きな水害が起きている。<sup>[7]</sup> 26年には大きな水害はなかった

ものの、現地の被害状況を考慮して戸隠神社に切り替えたと考えられる。ちなみに明治27年8月11日にも大きな水害があつたが、脚折雨乞はその2日前の9日に行われた。長野県の戸隠神社の奥社に水神を祀る九頭龍社があり、ここに池から貰い水を頂き、雨乞いに使ったのである。

ではなぜ九龍神社が選ばれたかについてははつきりせず、今後、脚折側の史料を探る必要がある。

### 5 脚折雨乞の概要

1964年まで	村の寄合で実施決定し、その夜には板倉に水を取りに行く。お水が来てから龍蛇を作成し、その日の午後には実施・不定期
1976年以降	1年前から脚折雨乞行事保存会が協議し、メンバーが麦を栽培し、龍蛇作成の麦藁を作つておく。翌年、実施日の1週間前から龍蛇を作成。前日には雷電神社でお水をもらう。4年ごとの8月第1日曜に実施

#### 当日の流れ

白鬚神社宮司によるお祓いと祝詞→宮司による龍蛇への入魂の儀（これにより龍神となる）→住民代表による御水献水の儀（貰い水を龍神に捧げる）→龍神太鼓を鳴らす→龍神渡御（300人が龍神を担いで練り歩く。山伏装束の善能寺副住職ら6人がホラ貝を吹く。棒で担いだ太鼓を鳴らしていく）。雷電大神や産土大神など10柱の神の名が書かれた幟を6本掲げて

いく) → 善能寺で住職による祈祷 → 雷電池に到着し、傍らの雷電社で白鬚神社宮司による御祓いと祝詞 → 雷電池に対し宮司の御祓いと善能寺副住職の祈祷・雷電池に対し住民代表による御水獻注の儀 → 龍神を池に入れ、「雨降れ、たんじやく(帝釈天)、ここへかかれ黒雲」と掛け声をかけながら池を回る → 合図とともに担ぎ手が龍神を解体する(龍神の昇天)

## 6 変容する蛇体と尻劍

2000年に鶴ヶ島市では古くから行事にかかわっている宮本豊太郎(白鬚神社宮司)・林九七(脚折雨乞行事保存会)らの聞き取り調査を行った。<sup>[6]</sup> まず①昔は「大蛇」といっていたのを復活した1976年頃から「龍蛇」と呼ぶようになった。鶴ヶ島町史編纂委員会の藤倉寛三が言い始めたという。古老たちによれば、「大蛇」の方に馴染みがあり、「龍蛇」といういい方には違和感があるという。

②顔が大きく変わったという。昭和20年代の写真を見ると丸い顔で、なまづのようである。それが「龍蛇」というように龍のように長い顔になった。

③1976年以前は龍蛇の長さや太さなどまちまちであったが、1976年以降、36メートル、胴回りも6メートルになった。

復活するに際し、蛇よりは龍の方がかっこいいということになったのだろう。現在、鶴ヶ島市は「龍のまち」としてアピールしている。市のマスコットキャラクターも「つるゴン」という龍である。

記録によれば、昭和4年の蛇体には角が付けられたことがはっきりしており、龍の形態になっていたがわかる。それでも古老たちには「大蛇」なのである。また

尻尾には尻劍という板で作った剣をつける。すでに明治26年からその存在が確認できる。この尻劍とは何であろうか。

宮本豊太郎によれば、「大蛇の尾の剣は、蛇神としての命が脱皮して偉大なる神の表象として具現したものである」と解説している。しかし、どうも腑に落ちない。2008年の雨乞に参加したところ、会場の解説者が「この剣は草薙剣でございます」とアナウンスしていた。大蛇といえば、ヤマタノオロチ。ヤマタノオロチといえば、草薙剣という連想で、尻尾につけるようになったではないか。

最初の脚折雨乞がどういうものだったか不明だが、当初は藁で作ったシンプルな蛇を使っていたのを、やがてヤマタノオロチにあやかつて尻劍を突けるようになったと推測する。実は尻劍をつけるのは脚折の龍蛇だけではない。

ジャガマイタ(間々田の蛇まつり・国選択無形民俗文化財)という栃木県小山市間々田で毎年5月5日(昔は旧4月8日)に行われる祭りがある。間々田八幡宮境内にある八龍神社の八大龍王の靈力で雨乞いをするもの。現在は長者町、間々田1丁目~6丁目の7つの町でそれぞれ大蛇を作り、八幡宮に集めて、それぞれ境内の池で水呑みの儀式を行い、各町内に散って練り歩く。これとは別に境内で蛇面の踊りという雨乞いの神楽も演じられる。間々田は飯田と昔は記された。田植え前に豊作を祈って雨乞いをしたのであろう。

旧暦の4月8日に行われていたこと、八大龍王(釈迦誕生のときに現れた八匹の龍)を祀ることから仏教的な色彩が見られるが、むしろ神仏習合と考えた方がよいだろう。ジャガマイタとは「蛇が参

った」という説と、「蛇がとぐろを巻いた」という説がある。昔は「ジャガマイタ、ジャガマイタ、4月8日のジャガマイタ」とはやしながら練り歩いたが、筆者が2013年に取材したところ、「ジャガマイタ ジャガマイタ」としか言つていなかつた。その理由は、現在は毎年5月5日に行われているからである。正月の獅子舞のように町内の家々の門口で無病息災も祈願する。また夕方には地元の小学校校庭で代表の三頭の大蛇が「蛇もめ（蛇同士を戦わせる）」という儀式も行う。

類似した祭に神奈川県横浜市鶴見区生麦の「蛇も蚊も祭り」がある。横浜市無形民俗文化財で、本宮地区と原地区に分かれ、前者は道念稻荷神社で三頭、後者は神明社で二頭の20mほどの大蛇を萱で作り、「蛇も蚊も出たけ、日よけの雨け」と叫んで町内を練り歩き門口で無病息災を祈る。ここは半農半漁の村だったので、雨乞も含め、疫病退散・五穀豊穣・豊年大漁などを祈られてきた。最後は「絡み」とって蛇同士を戦わせる。この点もジャガマイタに類似している。いずれも蛇が戦うのだが、戦うこと自体、雨乞いとは関係ない。おそらく後世、余興として行われるようになったと思われるが、もし原型となつた所作があつたとすれば、雄と雌が交尾し、子孫繁栄・五穀豊穣を願うという形態が変容したものと推測される。

地元では本宮地区の大蛇が雄、原地区の大蛇が雌といわれている。もともとは一緒に行わっていたらしく、本来は交尾を表わしていたものが、「絡み」という

戦いの形態に変容したと考えられる。ジャガマイタの「蛇もめ」も同じような経緯をたどつたものだろう。

ジャガマイタの大蛇にも「蛇も蚊も」の大蛇にも尻剣をつける。こちらも草薙剣にあやかったものであろう。いずれにせよ尻剣は龍蛇の靈力をパワーアップする重要なアイテムとして考えられているのかもしれない。



ジャガマイタの尻剣（2013年筆者撮影）

### 結びとして

時代は大きく変わっても雷電神社から貰い水を頂き、雷電池で厳粛な儀式を行うことは変わっていない。脚折雨乞の龍蛇は、巨大な龍蛇を池に入れることができインのように思われている。確かに龍蛇は鶴ヶ島市のシンボルでもある。

しかし、雷電信仰からいえば、貰い水の御神水こそが神の化身であり、最も重要なのである。龍蛇は神の依代にすぎない。依代という器であるから蛇体も変容すれば、尻剣もつける。貰い水はこれからも変わらず伝統を受け継いでいくだろう。龍蛇は時代と共に形を変えていくと考える。

ジャガマイタと蛇も蚊も祭りの大蛇は

小振りで、複数作られる。脚折の龍蛇と同じく両者とも大蛇に赤い角と尻剣をつけている。脚折雨乞の龍蛇も含めて本来は藁や萱で作った蛇体のものが、龍神やヤマタノ

オロチと関連付けられて現在のような形態に変容したものと考えられる。今後は国内外の龍や大蛇を用いた雨乞についても比較研究していく必要はあろう。

#### 注釈:

- [1] 許慎撰《説文解字》中華書局 1999年 242頁。
- [2] 謝肇淛《五雜組》上海書局出版社 2001年 167頁。
- [3] 前掲 12頁。
- [4] 鶴ヶ島町史編さん室『鶴ヶ島町史 民俗社会編』鶴ヶ島市 1992年 326頁。
- [5] 鶴ヶ島町史編さん室『鶴ヶ島町諸家文書目録（2）田中修家文書目録』1990年71頁 参照。鶴ヶ島市ホームページから「脚折雨乞の由来」を検索すると、引用の本文を見ることができる。「脚折雨乞」のパンフレットにも記載されている。
- [6] 『脚折の雨乞い』鶴ヶ島市教育委員会 2001年 36～64頁。
- [7] 板倉町史基礎資料第81号『板倉町災害・治水・利水史年表』板倉町 1979年 365頁。

#### 参考文献:

- (1) 『板倉町史 別巻4』 板倉町 1980年。
- (2) 任章赫『祈雨祭』岩田書院 2001年。
- (3) 藤元晶『雨乞儀礼の成立と展開』岩田書院 2002年。
- (4) 平沼浩「地方創生と伝統行事～土地の記憶を行動で共有する～③「脚折雨乞」前編」。
- (5) 『共済レポート No.149』 一般社団法人 J A共済総合研究所 2017年2月。
- (6) 平沼浩「地方創生と伝統行事～土地の記憶を行動で共有する～③「脚折雨乞」後編」。
- (7) 『共済レポート No.150』 一般社団法人 J A共済総合研究所 2017年4月。

(勤務先：大東文化大学地域連携センター)